

實らしからざるもの多きを指摘し、その大部分は編者の作爲に附會に出づるを臆断して居る。その著しきものは聖徳太子の憲法十七條を律令及國史の制定編纂を企てつゝありし時代の政府の何人か、儒臣に命じ名を聖者に傳へらるゝ太子に託してかゝる訓誡を作らしめ官僚の規準としたものであらうといふが如きはそれであり、書紀の編纂が長年月を要したのはかゝる記事を造作する必要ありし爲にして居る。そして全卷を蔽ふ支那思想の中に、なほ日本人的思想感情を發露せしめそこに一種の風格を生氣を生ずるに至つた。記紀の相違は前者が比較的前の思想を後者が後の時代のそれを示す點にあり、結んで居る。著者の學風がいかなるものであるかは人のよく知るところ、その着眼の奇警にして批判の鋭きところは云ふを俟たない。只我々の恐るゝところは我々の合理的要求に一致しない點があればそれを直に作爲し専らその立場に於て史料を批判するといふ態度が果して正當であるか否かの點である。史料はもう少し尊重さるべきではないのか。法王帝説にも太子が十七條法を作りし事は

見えて居る。作爲の力をあまりに大きく見ることはあまりに社會を愚にしたものではあるまいか。(菊判六九八頁、價五、〇〇圓、東京岩波書店發行)(肥後)

● 神道の研究

河村 省三著

著者は神道の語を解して「神道とは皇室を奉戴し神祇を崇敬して明淨正直の生活を營みつゝ、日本民族永遠の生命を展開し行くところの傳統的信念である」といひ、その表現を政治、宗教、倫理、教化等の上に認め、それら各方面に於いてその發達の跡を辿るに共に、別に神道の經典ともいふべき記紀の性質を考察し、神道の特殊な表現たる神社に就いて概觀を試みる。こゝによつて神道の general survey は完結するを考へる。本書はかくの如き方針に従つて成れる所のもの。叙述は極めて簡略であるが種々な(或は時に雑多な)資料を掲げ、主なる参考書を示して讀者の一層進んだ研究に便して居る。思ふに神道を以て著者の如く解するならばそれは殆ど國史の全體、若しくは少くとも其の最も中心的な一部をなすものといひ

うる。實にそれは著者のいふ如く日本民族の生活原理であり、日本文化の根柢であるであらう。然るに民族の特殊性の理解は近時に於ける最も困難なる問題の一である。單なる趣味や愛國心や其他あらゆる恣意に基く超越的觀念論的獨斷を避けると共に氣候風土による素朴なる地理的決定論に墮しないが爲には特に深重なる方法論的反省を必要とする。若し之を缺くならば如何に章節を改め叙述の體裁を變へるも畢竟明治以來の多くの類書に何等擇ぶ所がないものとなるであらう。さあれ所謂方法論的反省が單なる抽象的論理的思辯ではなくして具體的な現實に即してのものであるとするならば、この書の如きも正にその土臺となり、より新しい研究の發足點として十分なる實際的效用を果たすであらう。(菊判三九二頁、定價三、〇〇圓、東京森江書店)

● 日本道德史

清原 貞雄著

歴史認識の根柢に存する歴史家の世界觀人生觀の意義に就いては近時多く論ぜられてゐるが道德史の如きもの

に於いてそれは特に重要なものがある。蓋し等しく歴史的研究を稱せられるものにあつても外部的なる事實の考證確認等には比較的主觀的要素の混入することが少いに反し、道德的事象の如きものに關しては歴史家が全然客觀的たるべきが甚だ難いからである。従つてかくの如き著述に於いては著者が現在如何なる道德的見解を有するかを知ることに依つて容易にその書の問題、その方法、従つてその限界をも窺ふことが出来るであらう。

この書の著者は愛國の士である。現時我國の最も重大なる問題は經濟國難と思想國難とであり、兩者は密接不離の關係にあるも然も要するにその解決は國民精神の作興、國民道德の向上に俟たねばならぬ、而して國民精神國民道德の振作向上は道德に關する普遍的原理を明かにするのみでは十分でなく、その實踐の根柢として我國の歴史的事情並にその國民性の研究が必要であるとし、まづ總論として日本道德史の價値、日本道德の要素、日本の特性、國民性等を論じ、本論に於いては國有文化時代の道德思想以下時代を逐うて最近明治大正時代にまで及ぶ。そ

の説叙の體裁はほゞ著者の舊著日本國民思想史乃至日本史學史等に同じい。事の現代に屬するものほゞより著者の重きをおく所でないではあらうが、西歐思潮の輸入を説ける章節に於いて一二人名の誤があり、其の思想の理解の上に如何と思はれる箇所認められるのは偶々不用意に出づる所か、敢へて以つて彪大なる大冊全體の輕重を問はるゝに至るが如きことなくんば幸である。(菊判七五六頁、定價五、五〇圓、東京中文館(以上柴田))

● 堺 市 史 第二・三・四・七卷

堺市史編纂部編

本誌昨年七月號に紹介せる第一、六、七卷三冊について第二、三、四、七卷四冊が新に出版された。本史の特長價值に就いては前回や、詳述する所があつたから各卷を逐ふて概略の紹介を試みたい。

第二卷は本編第二として、第一卷の第二回遣明船の堺歸着の後をうけて、第三回遣明船の出帆より豊臣氏の滅亡に至る間堺の最も光輝ある全盛期の姿が全幅的に展開

紹介

されてゐる。遣明船に於ける堺商人の活躍は延いて日明外交貿易の全歴史を跡づける事であり、海運上占むる勢力は交通商業の隆盛を思はせ商人の商行爲、風雅の記述は一興味ある色彩を與へてゐる。又永き戦亂中此町の平和と富とが如何に重要視されたか、其商業の發達と自治體の發達とによつて町の繁榮を見、次で斯る好適なる土地の事情によつて當時の戦亂の災禍から保護され又新に發生した文化の諸相が記述されてゐるが、此は單に堺に於いてのみならず全日本に於ける文化の傳統と發展の上に光輝ある一節である。佛教に於いては大徳寺の有力なる支持者として、異宗として追はれた一向、日蓮宗の避難所として大きな功積有つてゐるが、この事情は絶えざる迫害に苦んだ耶蘇教に取つても京畿布教の無二の根據地として重大な地位を示されてゐる。圖書出版に於ては醫書大全、論語如き特殊なるものゝ出版に異色があるが、茶湯に於て紹鷗より利休に至る茶湯の傳統が此町の人によつて受継ぎ發展されたものとして堺市民の最も誇りとするものを詳述してゐる。文藝に於ける堺傳授、隆達節の

第十五卷 第三號 四四九